

# 超医学の謎(十字式背骨健康法の威力)

1987年 每日新聞社

佐藤 健 (さとうけん)

法政大学社会学部卒、毎日新聞社編集委員、

著書に「マンダラ探検」(人文書院)、「ルポ仏教」(校成出版社)

「ゆかいなゆかいな英雄たち」(毎日新聞社)がある。

曲がった背骨に手力と念力の治療をほどこすだけで多くの病気を治す「十字式健康普及会」が静かなブームになっている。創始者の安久津政人医学博士は、北海道の陽気な獣医さんで、次々と新しい発明を考案するおもしろい人間である。安久津医博は北海道十勝平野の北端、足寄町の農家10人兄妹の8番目に生まれた。

道立十勝農業高校獣医科から、北大獣医学部研究室を出て、獣医師国家試験に合格した。獣医になったことが結果としていくつかの偶然を生み、それがかさなって「十字式健康法」が生まれた。

## 安久津式健康法

1. 1日1回運動で汗をかく。セックスで汗をかくのも可。
2. 年齢に応じて食べる。理想的には穀類3, 動物性の食べ物3, 生野菜4, の割合。

## 精神エネルギーこそ治療の基本だ

十字式健康法は、治療者が患者の身体へ精神エネルギーを移植させることによって、患者の背骨を矯正し、病気の原因となっているゆがみを治すのだが、そのことを理解するためには人間が本来的にもっている「エネルギー」の種類をまず知る必要がある。人間を含めた動物は三種類のエネルギーから成り立っている。①物理エネルギー、②生命エネルギー、③精神エネルギーの三種である。

物理エネルギーとは熱、音波、光、磁波、化合、引力などのエネルギーである。例えば動物が口から食べた食物を熱に変え、それをさらに力に変えて生きるなどの基礎エネルギーである。

生命エネルギーは動物と植物とがもつエネルギーだ。動物は分子を集めて生命をつくり、植物は元素を集めている。植物は太陽光線を受け、炭酸ガスを吸い、地から水や無機養分をとって光合成を行い、植物有機化合物をつくる。動物はその植物を食べ、その植物を食べる動物をさらに食べて生命を保っている。これらはみな生命エネルギーの活動によるものなのだ。さらに動植物に共通的な生殖のメカニズムからもこのエネルギーの独立性は十分に考えられる。

三番目の精神エネルギーは人間と動物だけがもっているエネルギーである。このエネルギーを失った人間は植物と同じだから「植物人間」と呼ばれる。

人間というのは、その三つのエネルギーの調和をとりながら生きている。三種のエネルギーが密着する組織条件がそろった状態を健康といい、不密着のままで生活する人を病気という。そして完全に分離してしまったのを“死”をいう。

例えば、精神エネルギーをもたない植物でも物理エネルギーと生命エネルギーとが密着していれば、生き生きとしている。樹木全体は生きているのに枯れ枝ができるのは、その部分が密着していないからだ。人間の肉体でもその二つのエネルギーが密着していないと、しもやけになったり、皮膚病になったり、はては慢性の内蔵疾患になったりする。植物の枯れ枝と同じことだ。人間や動物にはさらに精神エネルギーが加わる。現代医学ではそれを精神神経科であつかうが、宗教ではそれは神が動物に与えた特別な能力としてとらえる。

現代医学は、人間の肉体を物理エネルギーや生命エネルギーの次元だけでみるから、病人に対して検査、検査、そして、やらなくともいい手術をしたり、薬漬けにしてしまったりする。もちろん、現代医学が細菌性の病気や外科手術などによって病を治すことに絶大なる能力を持っていることは尊敬するが、人間には、分子レベルで説明できない高度の精神エネルギーという独立して機能するメカニズムのあることを忘れてほしくない。

### 精神エネルギーは命令をする。

一度、十字式健康法の道場で、治療のやり方を見た人は、たいてい驚く。待合室で治療を待つ人は、まず自分の名前と、これまでに治療を受けた回数などを小さな紙に記入する。

自分の番がきたら、背中を治療者にむけてイスに座る。ふつうの病院だと医者はまず「どうしましたか」と患者に聞くことから始める。いわゆる問診である。

だが、十字式健康法では、その問診というのをしない。そのかわり、背骨にそって天花粉を塗る。そして宗癒師は人さし指と中指の二本を背骨の両面にあてがい、首の下から腰にむかってゆっくりとおろしてくる。当然、背骨に指の跡がつくが、その軌跡によって背骨のゆがみを読みとる。

宗癒師が訓練によってつくった精神エネルギーと、患者の背骨の中の神経を通って流れている精神エネルギーは同質のものである。そこへ、宗癒師の精神エネルギーを念力によって送り込むと、患者の精神エネルギーも応答し、共に脊髄を構成している生命エネルギーに命令する。生命エネルギーは精神エネルギーに対して下位のエネルギーですから、その命令を聞き、正常に復元する作用が倍加する。

私たちの体は、例えば背骨ひとつをとっても、いつも正常に戻りたいという欲求をもっている。ところが自律力が、なんらかの理由によって働かなくなっている。そこへ他動的なエネルギーを注ぎ込まれるから、その命令に反応して細胞の中の生命エネルギーが復元反応をおこして、背骨が瞬間に直立する。すれば、背骨のゆがみによっておきていたさまざまな病気も自然に治癒するのだ。

### 椎骨廃用性斜軸の病理

十字式健康法の根本的な原理は、これまでの科学理論や唯物的な考え方では説明できない、新しい次元の開発から生まれた生命論である。この十字式健康法にとって重要な事実がある。その事実とは、「椎骨廃用性斜軸の病理」というもので、安久津医博によって名づけられたこの病理を一言でいうならば、「背骨には病によって曲げられる性質がある」ということだ。

これまで、多くの病気は背骨がゆがんでいることから生ずるということはよくいわれてきた。その背骨のゆがみを治せば、それによって発生した病気も消えるといわれ

てきた。

ところが、安久津医博は、逆に「背骨には、病によって曲げられる性質がある」ことを発見したのである。

しかも、その廃用性斜転には「中枢性廃用性斜転」と「末梢性廃用性斜転」の二種類があることもわかった。まず「中枢性」のほうからみてみよう。例えば大脑半球が脳内出血によって障害を起こしたとしよう。そうすると、その脳の反対側が半身不随になる。つまり、脳内の中枢に障害が起きたことによって、正中神経(首のつけ根から肩の外側、手の親指や人さし指にいたる主幹神経)と総腓骨神経(別の名を座骨神経といい、腰から脚の先端にいたる最大神経)がマヒしてしまう。

ところが、この病気の場合は、半身不随になってマヒすると、一定のパターンに従って背骨も異常化するというのである。どういう症状になって現れるか。まず第一椎骨が斜転化し、第五腰椎骨と第一仙骨の間、いわゆる腰仙移行部の骨軸が正常側にずれてしまうのである。正中神経は、背骨の椎孔から出て、首のつけ根、肩、腕、そして親指や人さし指へとつながっているのだが、第一頸椎骨が斜転したために神経孔が後上側にずれてしまい、神経根がもち上げられる。その結果として手の長さよりも神経のほうが短くなってしまう。

神経線維はワイヤーロープのように、長さに対する融通性がないから、当然ひきつるようにはっぱられることになる。

また、腰から足の神経もまた、背骨が中心から反対側にずれてしまうために、同じように足よりも神経が短くなり、無理にひっぱられた状態になる。

神経の根幹部から出た、細い毛細神経の先端が全長にわたって遊離現象をおこすために、結果として「シビレ」や「痛み」になるというのである。

次に「末梢性椎骨廃用性斜転」発生のメカニズムを追うと、次のようになる。

末梢性の末梢とは、脳の中枢に対して、末梢の筋肉や組織器官のことで、それらの器官が疼痛障害を起こすと、それが原因となって、その神経起始部の背骨は斜転変形する。その疼痛障害とは、骨折、ネンザ、肝炎、胃炎、打撲など痛みをともなう病気のすべてである。それらの末梢器官が病気になると、必ず背骨のゆがみになってあらわれるという。

その現象を十字式では「末梢性椎骨廃用性斜転」と名づけたのだが、十字式健康法の会場にやって来る患者の30%~40%は、みなこの斜転から起きる慢性疾患なのだという。「胃が痛い患者が、医者へ行くと胃の薬をくれます。必要ならば手術もするでしょう。それでほとんどの病気は治ってしまう。たしかに現象として胃部にあらわれた病気は治ります。でも、その胃痛によって起きた椎骨の斜転は、実は治っていないのです。現代医学は斜転になんか目もくれません。胃さえ治ればその目的はすんでしまったわけですから。ところが、この斜転こそ、ほとんどの慢性疾患の最大の原因であり、それを治さないかぎりはダメなんです」

その椎骨の斜転の矯正こそ、現代人のもっとも大切な健康保持や半健康体矯正の核心であるというのだ。

## 神経孔と神経根の見事な一致

背骨がどのように変化すると病気になるのか、ということを理解するために、私たちの背骨がどのような構造になっているのかを調べてみよう。

背骨は30個の椎骨が連結し、しかもそれぞれの椎骨は関節のような機能をそなえながら、身体のさまざまな動きを支えている。そしてその中には脳中枢の延長ともいべき脊髄が入っている。

椎骨は上から頸椎骨が7個、胸椎骨12個(肋骨がついている)、腰椎骨5個、仙骨5個(骨盤

の中心にある)、そして尾てい骨が1個ある。それぞれの椎骨は形も役目もちがう。この椎骨の連結体である背骨の中には脊髄が通っており、脳髄につながっている。この二つは神経中枢と呼ばれており、全部あわせても体重の50分の1にも達しないが、この神経中枢が人間の心と体に及ぼす影響は計り知れない。いや、この神経は人間そのものといってもいいほど重要なのだ。なぜならば、この器官には、意志、感情、記憶などの精神の多様な機能がセットされており、外界からの情報を処理する機能があるばかりか、統覚の本態である靈魂までが宿っているといわれるからだ。

だから、人間の他の組織器官はこの精神臓器を包んで保護している器とみたほうがわかりやすい。

その脊髄病理を理解するために、人間誕生の段階で、その脊髄はどのように発生するかを調べてみよう。

安久津医博の説明によれば、受胎卵が母体の胎内で分裂を開始すると、間もなく、内、外、中という三つの胚葉に分かれ、身体の諸器官は、その三つの胚葉から分化して成長する。

この場合、注意してみなければいけないことは、神経の源ともいるべき脊髄は中胚葉から分化していくのに対して、その脊髄を保護している背骨は外胚葉から分化することである。

つまりその両者には組織的には結合性がない。

ところが、この脊髄から出て身体全体に配合される神経線維はすべて、背骨の側壁にある神経孔という細い穴から外に出ていく仕組みになっているが、その神経根と神経孔の関係は超精巧なメカニズムで、寸分の狂いもない。つまり器である背骨の神経孔と、その中身である神経の根は、寸分たがわず一致している。まさに神の配合としかいいようがない。

だが、そこに病の原因がひそんでいるというのである。

それぞれ発生の分化点が異なる背骨と脊髄は、ふだんはあつらえた注文靴のようにピッタリとしているが、ときとして、背骨が脊髄の存在を無視してその位置を変えてしまうことがある。ほとんどの神経痛、自律神経失調症は、背骨のこの神経孔と神経根の不一致に始まるといっていいほどだという。

## 生命のゆらぎと造血の関係

血液中の白血球が平衡状態を乱す白血病は、遅かれ早かれ死に至る病であることから血液のガンといわれる。しかし、安久津医博は「ガンのようにこわい病気ではない」という。

安久津理論によれば、この病気は、「バックボーン12の法則によって説明されるように、背骨の異常によって神経痛が起き、その神経感作を受けて造血器官である腸間膜が異常化して、その機能が低下したために起きる病気だ」というのである。

バックボーン12の法則では、背骨が何らかの理由によってゆがみを生ずると脊髄神経が牽引され、神経痛化し、その神経痛エネルギーが分布組織帯に放出滞留し、その直下の内蔵は連鎖反応で硬直化する。

この場合、直下にある内蔵とは小腸および腸間膜である。この部分の血管とリンパ管が硬直化組織帯となると、血球合成ができなくなる。また白血球もその分裂合体の母体がリンパ組織に関連しているために、この部分が硬直化すると、その機能が低下して、ガンまがいの不良細胞が異常分化して中に遊離するために白血病になるという。

そのカギとなる血球合成の過程はどうなっているのか。

「その奥義を追求していくと、神学的な神の創造論に行き着いてしまうんです」と安久津医博。そこが十字式が単なる医学ではなく、宗教的な解釈を加える“超医学”たる

ところなのだが、医博はまず「血液中の赤血球は細胞分裂によってできているものではない」という前提から出発する。いずれにしても赤血球ではバイオバイブレーションとも解すべき生命運動によって集結してできるというのである。

このミクロ的な運動を一部の生物学者は「生命のゆらぎ」ともいうが、この「ゆらぎ」が吸収された栄養成分に働きかけて血球を造っていくというのだ。植物の「ゆらぎ」の場合は元素を集合させて有機物が合成されるという。

「それが生命機能を理解するための生化学の基礎なんです。」

そしてこのバイオバイブレーションによって栄養素が血球に合成されるところが小腸と、それを支える上腸間膜静脈だというのが安久津理論なのだ。

### 十字式が矯正する背骨の12か所と病気との関係

- ① 正中 正中神経痛・三叉神経痛・頸肩腕神経痛・偏頭痛・耳鳴り・不眠・歯痛・肩こり・脳腫瘍・頭頸運動障害・拇指及び人差し指のしびれ・バネ指・50肩
- ② 横骨 横骨神経痛・肩こり・50肩・心臓病(不整脈・期外収縮・弁膜症・狭心症)食道咽喉炎・中指のしびれ・バネ指・うつ病・心因性高血圧症(下が高くなる)
- ③ 尺骨 尺骨神経痛・心臓疾患(心嚢炎・心臓神経症)多汗症・上部肋間神経痛・小指及び薬指のしびれ及びバネ指・呼吸障害・上部気管障害・メニエル氏病・小児てんかん・特に自律神経失調症といわれる異常の個所
- ④ 上肋間 肋間神経痛・ぜんそく・乳腺及び乳房疾患・乳癌・肺気腫・肺癌・帶状疱疹・心臓ぜんそく
- ⑤ 肋間 【右側】肝硬変・胆のう炎・肝機能障害【左側】胃炎・胃痙攣・胃潰瘍・ベーチェット病・12指腸潰瘍・膵炎・糖尿病・胃下垂・胃癌・蕁麻疹
- ⑥ 肋腹 脾臓障害・血小板及び白血球造血不良・鼻血及び体表うっ血斑症・副腎障害・腎臓障害・小腸障害
- ⑦ 腰椎 腰髄中枢障害とくに就寝腰痛・輸尿管障害・腎う炎
- ⑧ 上腰仙 腹側大腿皮神経痛・便秘・大腸障害・卵巣疾患・生理痛・腰痛・虫垂障害・腹筋硬化症
- ⑨ 坐骨 坐骨神経痛・便秘・痔・子宮筋腫・子宮癌・前立腺肥大・直腸障害・膀胱炎・腰痛・夜尿症
- ⑩ 仙骨 局所腰痛のみ、長神経に関連性なし、2次症状もなし
- ⑪ 仙尾 両側アキレス腱炎・両側性膝関節炎・腰痛・老人性両側性歩行困難
- ⑫ 尾てい 尾てい骨局所痛・片側アキレス腱障害・足底部麻痺疼痛・膝関節・足関節炎・恥骨閉鎖症・産道狭窄(ほとんどが帝王切開される)・足の外転運動不良(アグラ座りができない)・大腿骨周辺筋肉萎縮(ここは現代医学の重大な盲点)

## 十字式のバックボーン12の法則

- ① 椎骨中枢性廃用性斜転の原理 ..... 脳の中枢に障害が起きると第一頸椎骨と、第五腰椎骨と第一仙骨の間が斜転する。
- ② 椎骨末梢性廃用斜転の原理 ..... 末梢の筋肉や組織器官が疼痛障害を起こすと、その神経起始部の背骨は斜転する。
- ③ 椎骨捻転による神経痛発症の原理 ..... 椎骨が捻転すると、その椎骨の神経孔から出ている神経はひっぱられて神経痛になる。
- ④ 脊髄神経の植物的感性による線維短縮の原理 ..... 神経には熱や痛みを感じると植物的に縮んで反応する性格がある。
- ⑤ 脊髄実質の無痛性と反射能の法則 ..... 脊髄は注射針を刺しても痛くはないが反射能力はもっている。
- ⑥ 神経痛連鎖発生の原理 ..... 尺骨神経痛が起きると第一・第二肋骨の神経痛も随伴して起きるなど。
- ⑦ 自律神経線維の二種混合性と知覚回路の法則 ..... 交感神経と副交感神経が、混合神経になって心臓へ行くことなど。
- ⑧ 神経痛と神経根叩打反応正比例の原理 ..... 神経根を叩打すると、その神経痛の強弱に正比例して反応を示す。
- ⑨ 内蔵疼痛の脊髄知覚神経への転写伝達の原理 ..... 内蔵が痛むと、脊髄の知覚神経へ伝達が行く。
- ⑩ 脊髄神経根の上下運動性の原理 ..... 脊髄神経根はヒモのように上下運動していること。
- ⑪ 脊髄内各臓器支配中枢の椎骨単位独立の原理 ..... 胃や肝臓などの各臓器への命令は脳からくるのではなく、脊髄内の支配中枢が独立して行う。
- ⑫ 脊髄神経と内蔵効果の因果律 ..... 脊髄からでている神経が神経痛化すると、その神経の下にある内蔵は硬直する。